

東京蜘蛛談話会通信 No. 97 (1999年9月26日)
編集・佐野文雄 / 印刷・本紙 東京都豊島区 光プリント
付録 潟田博明

1999 年度採集觀察會

②場 所：山梨県 扇山

@第3回：1999年10月17日（日）

(残りは最終回2000年2月20日のみです！)

②集合：JR中央本線烏沢駅改札口周辺 午前11時（時間厳守）
→改札口は1カ所しかありません。

付近では弁当を買うことができません。持参お願いします

④@コース：鳥沢駅から甲州街道を渡って、鳳山登山道を直進します。

山頂までの途中で、昼食午後の採集となる予定です

@世話人：新海 明(042-522-2605)

大川秀治(042-744-1470)

合同例会のお知らせ

日時：12月5日（日） 10:00～

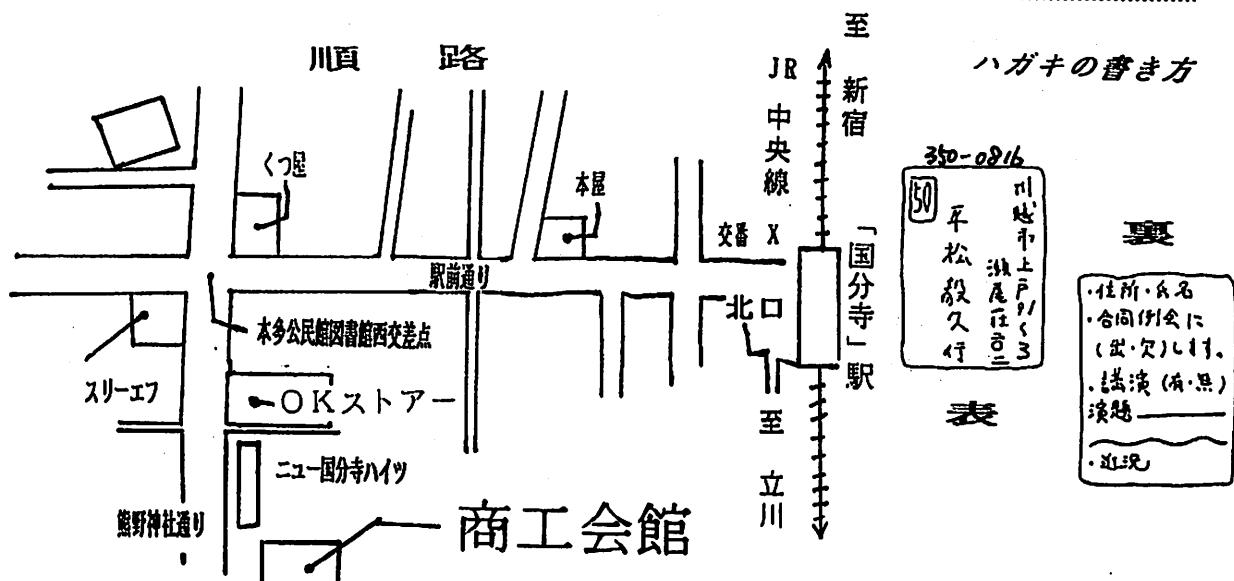
場所：東京都国分寺市商工会館3階「大会議室」 (042-323-1011)

東京都国分寺市本多2-3-3 JR中央線「国分寺」駅北口下車 徒歩約10分

多足類懇談会と合同による講演と懇親会

世話人：事務局・平松毅久 (0492-33-8792)

同封の葉書にて出欠と近況を平松までお知らせ下さい。近況は通信誌上に掲載します。



敦賀合宿報告

ムツトゲイセキグモを敦賀でもみつけたぞ！

新海 明

東京蜘蛛談話会の最近の入会者の中には若人も少なくはないが、全体としてみればやはりご多分にもれず高齢化の波が押し寄せている。そんなわけで、ここ数年間の合宿では2日目の午後はあまり無理をせずに休憩の時間を作ることを常としていた。具体的な声に接したことではないけれど、私がひそかにうかがい知るところ「この時間」は意外と好評のようだ。海辺で遊んだり、お土産を求めたり、はたまたクーラーの効いた部屋で午睡をむさぼったりと、各人各様さまざまなひとときを過ごすことができる。そして、この時間をも「もったいない」とばかりにクモの採集に明け暮れる談話会の精鋭部隊も存在するのだ。

今回の合宿でも、中池見湿地での午前の部が終わると同時に新海栄一・貞元、そして若手のひとり石島の各氏は、さっそく午後の採集へと行動を開始した。ご存じのように彼らには「新海係数」とか「貞元係数」と呼ばれる採集方程式があり、われわれが終日かかって採集したクモ数も、彼らが出現すると瞬く間に20～30%も跳ね上がってしまうという、談話会にとってなんとも有り難い「必殺仕事人」なのである。そのためか、彼らと一緒に午後の採集に行きたいという「命知らず」の若者もときどき現われる。しかし、その昼夜を無視した採集活動はあまりに苛酷なために、沖縄合宿の際の千田氏の運命のように「あわや一命をとりとめた」若者もいたのである。私はその夜、隣のベッドで「もう二度と行かないぞー」とうなされていた千田氏のうわごとを聞いてしまったのだ（でも、この時は私の身代わりで行ってくれたのでしたっけね。ゴメンネ、チダクン）。今回の精鋭部隊に同道したのは石島・初芝夫妻そしてまた懲りもせずに千田の各氏だった。私もどうしようかなと一瞬は迷ったのだが、体力気力とも無理だと悟り、あとで涼しくなったら宿舎のまわりでもうろつこうと参加をやめた。暫らく桃源郷をさまよい、強い日差しがやや穢やかに傾いた頃に、宿舎「伝平荘」をあとにした。同行してくださった別動部隊の参加者は金野・徳本・八幡の各氏であった。

採集中に向かった先は、昨晩の観察地の少し奥であった。そこは梅林や水田が点在する丘陵で、なんとなく「匂う」場所であった。私の眼はすでに「珍品狙い」用のレンズに置き換えられていた。どうせ、おまけの採集会だからと思いつき焦點距離を絞った。すぐにトリフンとオオトリの影が飛び込んできたが、これらは一切無視である。棚田のように一枚ずつ上へ上へと広がる梅林の中へ入りこみ、葉裏をのぞいていった。奥まで行き着くとクリの木が一本立っていた。トリフンがいた。そして、やや左に眼を転じたときに釘づけになった。クリの葉から糸に垂れ下った一頭のクモがいた。すぐに、トリフンではないと私の勘ピュータが告げていた。クモは糸の先でくるくると回転していた。じっとしてくれ

ないかと思うがなかなか止まらない。暫らく凝視して確信したところで、「おーい、船が出るぞー」ではなく「ムツトゲだー」と声を張り上げてみんなを呼び集めた。八幡さんは氏の主宰する「土蜘蛛通信」の原稿にするつもりか、デジカメで盛んに写真を撮っていた。徳本先生も見るのは初めてのことであった。もっといるかも知れないと周囲を探すが、そうは間屋が御さなかった。夕食の時間も迫り、また今夜ということで、鼻たかだかで宿舎に戻った。狙って探れるものでもないが、狙った通りに発見した時の喜びは同好の士しかわかるまい。この感動があるからやめられないのだろう・・・ね、みなさん。

かくして、クモリストの処女地である福井県でもムツトゲイセキグモを記録することができたわけである。

(追記) さすがと言おうか、この日の夜間調査で新海栄一氏もムツトゲを採集した。全員が通過したあとの道沿いで発見したのは同氏ならではだが、さらにびっくりしたのは、なんとムツトゲを見付けたのはガードレールだったとのこと。移動中だったのだろうか。

第1回採集観察会（扇山）参加雑感

和仁道大

中央線の高尾までは知っていましたが、その先にある扇山という所は全く知りませんでした。扇山の山麓を歩きはじめると、野鳥がいっぱい鳴って、よく聞くとなんとオオルリのようです。首都圏ではめったにお目にもお耳にもかかる貴重な鳥です。泉さんはいち早く気づいて工藤さんと話していましたが、ほかの人たちはクモ探しに熱中して、鳥の鳴りにはまったく無頓着のようでもったいないなと思いました。残念ながらオオルリの姿は新緑の木々に覆われて確認できませんでしたが、鳴りは堪能できました。お弁当を食べた所で泉さんが珍しい鳥がいると言うので、急いで双眼鏡で合わせると、見たことのないサーモンピンクのようなきれいな鳥が林縁の樹枝に2羽止まっていました。鳥の図鑑は持つてこなかったので、眼にしっかり焼き付けることにしました。家に帰って鳥の図鑑を調べてもそれらしい鳥は見当たりません。泉さんの方も初めは？でしたが、あとで博物館で鳴りの方と環境面から検索して、カッコウの仲間のジュウイチという鳥の幼鳥らしいということになりました。しかし図鑑にのっている色とは随分差があり、クモの図鑑と同様あてにならないことが分かりました。

さて冒頭からトリの話ばかりになってしまい、クモのことを書かないと会報にのせてもらえないので、少し書きます。私にとってクモは余技の部類に属し、飼育はもちろん採集もしないで、観るだけという談話会にとっては不真面目な会員です。当日はコケオニグモが出たと皆さん騒いでいましたが、私にはその有難味がまだピンときません。私にとっての収穫はヨダンハエトリがクモ図鑑の裏表紙の写真よりもっときれいにみえたことと、きれいなチュウガタコガネグモが円網に鎮座している姿でした。いずれにせよ高尾より少し先に、こんな自然の豊かなところがあるということを知ったことが一番の収穫でした。

1999年度第1回採集観察会 1999/5/16 於 山梨県大月市扇山 天候曇り

東京蜘蛛談話会の採集観察会に正式に参加したのは、1986年10月に扇山で行なわれたものからだった。正式と書いたのは、ずっと以前中高生の頃に「オマケ」で参加していた時があったからである。その当時は、見るもの聞くものがすべて目新しく、また「珍しいクモ」を探ることに喜びを感じていたように思う。それからかなりの時が流れ、クモの網ばかり追い掛け続け、談話会の活動には無関心だった80年代の半ばに、ふと気紛れに参加したのが、この扇山だった。知り合いも少なく、確か谷川さんと田副さんを相手にジョロウグモの餌捕獲行動を解説しながらぶらぶらと歩いていたのを懐かしく思い出した。

13年後の鳥沢駅から扇山へのコースは、やはり開発の波に洗われていた。しかし、住宅地の裏手を走る山道は昔のままで、新緑で彩られた山裾には植えたばかりの稻田がすがすがしかった。普通に歩けば15分ほどの距離ではあったが、ここまでで約2時間。予定より少し遅めだったが、まあこんなものだろう。午前中の採集を終え、お昼となつた。水田の畦に腰を下ろして、めいめいお弁当を拝げた。萩本さんのお子さんの明洋くんは、参加者のアイドル的な存在だった。元気いっぱいで走り回り、最後には傷薬のお世話になっていた。初芝夫妻も琢磨くんを連れて参加して下さった。よちよちだがひとり歩きをしたり、それを見ているご両親以外の大人たちが心配でたまらない様子だった。いつも感じることだが、子供たちが加わると大人たちまで急に活気が出てくるような気がする。なぜかそのエネルギーを貰い受けてしまうようだ。老若男女がそろつた、このような会こそ、やはり理想なのだろう。

そのせいかどうか・・・。ひさびさに100種をこえるクモ（121種類）が記録できた。場所も良かったのだろうが、夏、秋と続く採集会のリストが楽しみである。そして、担当者の独断であるけれど、冬の採集会には久しぶりに「豚汁の会」を再開しようと考えている。

参加者（敬称略）：赤羽尚夫、今井正巳、石島 力、池田博明、泉 宏子、梅林 力、
大川秀治、加藤むつみ、木村知之、工藤泰恵、小峰光弘、貞元己良、
新海 明、高橋 登、萩本房枝、萩本明洋、初芝伸吾、初芝 涼、
初芝琢磨、安田明雄、和仁道大（以上21名）

目 錄

シグモ科 シグモ住居

ユウレイグモ科 ユウレイグモ F Mm,

ミヤグモ科 ミヤグモ F y,

ハグモ科 カレハグモ F,

ウズグモ科 ウズグモ y,

ヒメダモ科 オオヒメグモF f e, ヤリグモy, バラギヒメグモFMf, ヒロハヒメグモF, ギボシヒメグモm, ヤマトコノハグモy, ツノナガイソウロウグモf, ツリガネヒメグモy, タカユヒメグモf, オナガグモfm, ユノハマヒメグモM, カレハヒメグモFM, チリイソウロウグモy, ムナボシヒメグモM, スネグロオチバヒメグモy, ハラナガヒシガタグモM, ボカシミジングモF, ツクネグモF, シモフリミジングモy, フタオイソウロウグモy, トビジロイソウロウグモy, コアカクロミジングモy, ハイイロヒメグモM, カグヤヒメグモMy, コケヒメグモM, カニミジングモy,
サラグモ科 アシナガサラグモy, ユノハマサラグモF, ヘリジロサラグモFm, ツリサラグモFM, クスミサラグモFM, アショレグモf,
センショウグモ科 センショウグモM,
カラカラグモ科 ヤマジグモy,
コガネグモ科 ヨツデゴミグモF fm, ゴミグモFMmf, ギンメッキゴミグモFy, ヌサオニグモy, チュウガタコガネグモf Mm, ジョロウグモy, アオオニグモF, イシサワオニグモy, ヤマシロオニグモy, オニグモy, ヤミイロオニグモF, ワキグロサツマノミダマシfm, カラフトオニグモFm, ズグロオニグモFM, ヤエンオニグモy, コガネグモy, ヤマゴミグモMy, コケオニグモy, シロスジショウジョウグモm, カラオニグモy, ムツボシオニグモFM, トゲグモy, キジロゴミグモy, シロオビトリノフンドマシy,
アシナガグモ科 アシナガグモF fy, コシロカネグモy, キララシロカネグモy, オオシロカネグモF, メガネドヨウグモF, ウロコアシナガグモm,
ヒラタグモ科 ヒラタグモf,
タナグモ科 クサグモy, コクサグモy, メガネヤチグモF, シモフリヤチグモF,
ササグモ科 ササグモf, クリチャササグモFy,
コモリグモ科 ウツキコモリグモy, イナダハリゲコモリグモMf, ヤマハリゲコモリグモF, クラークコモリグモF, ハリゲコモリグモfm,
キシダグモ科 スジアカハシリグモy, アズマキシダグモf, イオウイロハシリグモy,
フクログモ科 イタチグモy, カバキコマチグモfy, ハマキフクログモF, マイコフクログモF, イナフクログモF,
イツツグモ科 イツツグモf,
ワシグモ科 クロチャケムリグモF, エビチャヨリメケムリグモM,
シボグモ科 シボグモFMy,
エビグモ科 シャコグモF fy, キハダエビグモF, アサヒエビグモy,
カニグモ科 キハダカニグモfy, ワカバグモfm, ヤミイロカニグモFM, フノジグモF, アマギエビスクグモF, ハナグモMf, コハナグモMm, ガザミグモFM, トラフカニグモFm, クマダハナグモF,
ハエトリグモ科 アリグモFMf, ヤサアリグモF, ヨダンハエトリMf, マミジロハエ

トリM f, キレワハエトリF (?), ヒメカラスハエトリy, シラヒゲハエトリf, デニツツハエトリF, カラスハエトリy, ヤハズハエトリf, チャイロアサヒハエトリy, ネコハエトリF, オオハエトリM, ウスジハエトリM, アオオビハエトリMy,

計23科121種

ちなみに、談話会の採集会における1日だけでの採集記録のベスト5は以下の通り。

- | | | | |
|----------------|------|-------------|-----|
| 1 東京都八王子市八王子城址 | 140種 | 1989年 5月21日 | K61 |
| 2 東京都あきるの市横沢入 | 126種 | 1992年10月18日 | K66 |
| 3 神奈川県厚木市飯山観音 | 122種 | 1993年 5月16日 | K71 |
| (令不明の3種を含む) | | | |
| * 4 山梨県大月市扇山 | 121種 | 1999年 5月16日 | 今回 |
| 5 東京都あきるの市横沢入 | 118種 | 1992年 5月17日 | K66 |

神奈川県秦野市丹沢の大倉でも、1987年7月に126種を記録しているが、これは合宿をかねて実施したもので1日の記録ではないので省略した。

(新海 明)

イソウロウ・コラム v. 3

シャジクモとは何ぞや

インターネット上でクモ情報を検索していると、千葉にある某高校のホームページに行きあたりました。「シャジクモの研究」え!? シャジクモとは聞いたことがない、すは新種かと思いました。それでそのホームページを開けてみると、なんとシャジクモとはシャジク藻(車軸藻)という緑色藻類のことでした。これはコンピュータが意味なく「クモ」という文字だけを拾ってしまった結果です。

インターネットは情報の宝庫か、ガラクタの山か色々いわれています。某検索エンジンで「クモ」のデータを引いてみると、なんと件もあります。一瞬、世間はそれ程にも「クモ」についての情報を発信しているのかと驚きます。というのはひとつひとつの内容を確かめると、「今朝、うちの玄関にクモがいた」といった類の話の大群です。考えようよってはほんとうにガラクタの山です。ただ実際そんな山にも確かに、珠玉が埋もれています。談話会会員の中にもすでにクモのホームページを立ち上げている人もいます。また日本蜘蛛学会もホームページの立ち上げを予定しています。これからは宝探しではなく、実際のクモ情報の収拾に充分利用できるまでになるでしょう。

(編)

1999年度第2回採集観察会 1999/1/11 於 山梨県大月市扇山 天候大雨

東京蜘蛛談話会の採集観察会は常に雨天決行である。梅雨の中休みが暫らく続き、下り坂との天気予報は聞いていたが、なんとかなるだろうと高を括っていた。千田氏と車中で一緒にになり降り立った鳥沢駅では雨は小止みとなっていた。「これなら大丈夫」と思った。しかし、朝方の激しい降雨に参加を断念した方々もきっと大勢いただろう。それが「まつとう」というものかもしれない。それでも7名の参加者がそろったところで出発とあいなった。いったん止んでいた雨足は再び少しずつ激しさを増しつつあった。でも、皆さん雨にもめげずに採集を続けていた。幼稚園を右手に見ながら道はやがて大きく左にカーブし住宅地にはいる。傾斜地にへばりつくように宅地が点在するが、ここで土砂降りになってしまった。しばらく身動きできないような降りである。坂道となった道路は瞬くうちに川となってしまった。側溝からは水がしぶきを上げながら流れ落ち、その水嵩はあつという間に上昇していった。弁当を食べる場所もないし、「今日はここまで」と覚悟した。先にいつた参加者に中止を告げたが、なんだか談話会の伝統を汚すようで肩身が狭かった。そんなわけで、今回の成果は30種と最低だった。雨のなかを参加してくれた皆さん。本当にご苦労さまでした。

(新海 明)

参加者（敬称略）：大川秀治、加藤むつみ、工藤泰恵、貞元己良、新海 明、笹岡文雄、
谷川明男、千田高史、安田明雄（以上9名）

目録

ジグモ科 ジグモFy
ユウレイグモ科 ユウレイグモFe
ミヤグモ科 ミヤグモy
ウズグモ科 カタハリウズグモF, マネキグモy
ヒメグモ科 オオヒメグモFye, ヤリグモFM, ギボシヒメグモFe, ツノナガイソウロウグモFe, ツリガネヒメグモFe, チリイソウロウグモf, ヒメグモf
サラグモ科 クスミサラグモy,
コガネグモ科 ゴミグモFe, ギンメッキゴミグモf, ジョロウグモy, ヤマシロオニグモy, イエオニグモy, ワキグロサツマノミダマシy, ズグロオニグモy, ナガコガネグモy, ヤマトゴミグモfy
アシナガグモ科 アシナガグモy, コシロカネグモF, キララシロカネグモF
ヒラタグモ科 ヒラタグモy
タナグモ科 クサグモm, コクサグモy
コモリグモ科 ウツキコモリグモF
エビグモ科 アサヒエビグモF

計12科30種

日本蜘蛛学会大会 開催される!!

今回で31回目を数える日本蜘蛛学会大会が、8月21日(土)～22日(日)広島市内の環境保健協会を会場にして開催されました。北海道から沖縄まで全国から、60人余のクモ・多足類の研究者の参加者がありました。そして2日間で口頭17題、ポスター4題、特別展示4題の発表が行なわれました。東京蜘蛛談話会でも活躍されている何人かの方々も発表をされています。(次頁参照)

発表の時間は一人15分(発表12分質疑3分構成)の割り当てでしたが、いずれも内容が濃い研究や報告でした。

さらに21日は「分岐分類によるクモ類の系統推定」、22日は「形質の地理的分化と種分化」の各シンポジウムが開催されています。21日のシンポジウムは現在クモ類の分類に浸透しつつある分岐分類について、その方法や考え方を3氏(谷川明男、安倍 弘、千田高史)による講演の後、活発な論議が行なわれました。翌日は地表活性のクモ類などが示す、形質上の地理的分化の研究成果の討議が行なわれました。講演は3氏(鶴崎展巨、井原 庸、田辺 力)によりました。

今回の大会は特にプレシンポ、観察会等の催しは行なわれませんでしたが、発表内容も充実した盛会の内に終了しました。

なお来年2000年の第32回大会は東京都文京区本郷の東京大学にて、8月下旬(開催日未定)に開催されます。

参考までに口頭発表の演題について記しておきました。内容をもっとお知りになりたい方は発表要旨が後日蜘蛛学会誌「Acta arachnologica」に掲載になりますので、ご覧なつて見てはいかがでしょうか。

(日本蜘蛛学会 年会費正会員¥7,000学生¥5,000 郵便振替 00970-3-46745)

口頭発表演題

21日

「洞窟生態系の視点からの保全対策の検討」入江照雄(スライド)

「キムラグモ個体群の衰弱状況」菊屋奈良義(OHP)

「石川県におけるイソコモリグモの過去50年間の生息数推移」徳本 洋(スライド)

「水田のクモ類に対する農薬の影響」田中幸一(スライド)

「薩南諸島のクモⅡ」石野田辰夫(スライド)

「北海道のクモ類相について」松田まゆみ(スライド)

事務局は 平松毅久 〒350-0816 埼玉県川越市上戸91-3 濑尾荘202

- 「河川敷のクモについて」萱嶋 泉(スライド)
「カマキリモドキ類2種の生息地におけるクモ相」平田慎一郎・石井 実(スライド)
「ヒコナミザトウムシにおける性比と交尾後ガードの関連」足達珠美(OHP)
「アリグモ雄間の闘争における鉄角の機能」榎元敏也(スライド・OHP)
「ハヤテグモの婚姻給餌行動」板倉泰弘(スライド・VTR)
- 22日
- 「グリーンボトルブルータランチュラの交尾行動について」八幡明彦(スライド・VTR)
「アズチグモの生活史」宮下和喜(スライド)
「オオヒメグモの過冷却点と消化管内容物」田中一裕(OHP)
「ジョロウグモの赤ちゃん時代の不思議な生態」大崎茂芳(OHP)
「トリノフンダマシの驚くべき糸の性質：ナゲナワへの劇的な進化の橋渡し？」
宮下 直・カルタン和美(スライド・OHP)
「ヒメグモ科イソウロウグモ属のクモの後疣出糸管の形態について」梅林 力(スライド)

++++++

「談話会通信」について

1. 会の催しの告知など、会員の皆さまへの種々の連絡を主な目的としています。
2. クモおよび蝶形類全てに関して、「Kishidaia」誌ほど専門的ではない文章を掲載します。合わせて新聞雑誌等の記事の紹介も行ないます。
3. 郵便料金の関係で、本誌1号原則12円 最大20円です。これに付録が1~3枚程度付くことがあります。
3. 单年度最低3回の発行を基本としています。
 - ①その年度の1号目の発行日は5月第3または第4日曜日
2号目の発行日は9月第3日曜日
3号目の発行日は2月第1日曜日
 - ②各号の各号締切は1号目が4月末日、2号目が8月末日、3号目が12月末日です。
 - ③締切を過ぎた投稿の掲載は原則次号以降になります。
 - ④投稿文は内容によって「Kishidaia」誌に掲載をお願いすることができます。
 - ⑤投稿原稿および新聞雑誌等の記事切り抜きは原則お返ししません。
 - ⑥新聞雑誌等の記事切り抜きは、特別な場合を除いて「付録」に掲載します。また投稿の締切にかかわらず掲載時期は不定になります。

編集担当：笹岡文雄

〒170-0004 東京都豊島区北大塚3-12-21

会計は 安田明雄 〒266-0011 神奈川県横浜市緑区中山町329-1 中仙ビル4F 506

ジョロウグモだより 野崎文江

クモは姿を見ると大騒ぎをする人が多く嫌われ者です。今、クモを観察して稻作の管理にやくだてている農家があります。私の家に野菜を売りに来る農家の人は。私とクモとの付き合いは、毛呂山に住んで、庭の木が大きくなって來た昭和58年頃からです。6月の中旬過ぎ毎年玄関の軒に巣を掛けるようになりました。クモについて全然素人です。玄関の木の植え込みが茂ってきて、色々なクモが住みつくようになりました。図鑑などで身の回りにいるクモを観察することぐらいです。その中から、色が美しいのとあでやかさでジョロウグモと付き合うようになりました。観察しているうち、気温と出現する時期について調べようと思いました。野菜を売りに来る例の農家の人が稻作の管理が五月から六月にかけて大変だと話がでました。私はジョロウグモと気温の関係について話をしました。「へえ、クモが気候を教えてくれるとはねえ。観察してみるとか。」と云って帰っていました。今までに観察されたことは、クモの親は前年の11月頃卵のうを生みます。(ふ化)は5月上旬。その数200以上一つ一つ小さな糸を出し納豆のようにかたまって巣をつくります。気温が低く(20度以下)曇りや雨の日は、かえった子グモはかたまつたまま巣からは出ません。えさに蠅を与えて、てつかず、ともぐいもありませんでした。子グモを一つ一つ同じ木の5カ所の枝にはなしてやりましたが、翌日気温が16度と低いのか、元の巣もどってかたまっています。天気図ではオホーツク海高気圧が北の海から張り出し、東北では“やませ”が吹いて低温になります。霜注意報ができる時はクモの出現は遅く体は小さいです。稻も小さく、株の生育はできません。米騒ぎの年はまさに、冷害予報的中。太平洋高気圧が日本に張り出し気温20度~25度以上、クモは一つ一つ糸を出して飛んでいきます。稻も株をふやすのです。農家の人もジョロウグモの観察をして、植えた稻の管理に役立てたそうです。今年は5月の中旬フェンスの上の隅に人差し指の頭程の巣を掛けました。体長1・5ミリ。ペンキ屋がフェンスにペンキをぬるというので行ってみると子グモがいます。ペンキ塗りはクモがいるから中止です。8月11日クモの体長♂7ミリ♀1・5センチ。23日涼しい庭の木陰で5組のお見合いが始まりました。生育は順調です。稻も花が咲きました。

濡れ手に糞のクモ採集

笹岡文雄

東京のど真ん中に住んでいるとクモにかぎらず、なにがしか生物を採集するにはそれなりの場所へ出かけていかなくてはなりません。そんな状況下ひよんなことで職場が、東京の奥の方、多摩地区の外れに異動になってしまいました。

職場の裏手には何かありげな雑木林あったとはいえ、一応は住宅地に位置する立地条件通勤が遠くなつたと恨みつつ勤務が続きました。

しかし広場に面した1階にある職場の異変に気づくのには、それほど時間はかかりませんでした。ある朝出勤すると黒い大きな虫が、目の前を横切り壁ぎわ走り去ります。朝っぱらから不愉快なことこの上なしとはこのことです。ところが古新聞を丸めて近づくと、それは想像していたものではなくやや黒味の強いアオオサムシでした。

また別の日入り口での拾物は、真っ黒なかたまりでした。誰かが土くれでも蹴込んだのかと、こっちも蹴り飛ばそうとしました。するとその土くれには足が6本、しかも前肢がノコギリ状。なんとダイコクコガネの♀の成虫だったのです。

昆虫がそんな調子ですから、注意しているとクモもいるわいるわ。ほとんど幼体ばかり入り込むコモリグモ (*Pirata sp.*) が優先種です。そして以外に多いのが色々なクモの合成体が徘徊してくることでした。去年はヒラタグモとオオヒメグモ(こっちは普通)とクロヤチグモでした。

実は職場の建物を挟んで正面は住宅地、問題の裏手の雑木林の向こう側は谷戸がいくつ連なつた田んぼがあったのです。そこから色々こぼれてくるクモがさらに、迷って職場をうろついていたわけです。昼休みに偵察に出たところ危うく時間内に戻れないほど、自然が残っている場所が、後に隠れていたとは気が付きました。

そんなことでほんとうのところはまだ明らかではないので、もっぱら室内徘徊種を狙っています。ただし今のところ採集の方は、あまりうまくいっていません。お客様が来ていたために採集し損なうという事態がたびたび発生してしまうので、影を見ただけとなっているからです。それに事務室内で採集ピン片手に、走りまわるわけにもいきません。

やっぱり居ながらにしてクモが揃うなど、そんなことを願ってはいけないですね。近世ヨーロッパのキャビネットナチュラリストのように、採集人を世界中に飛ばして、数々の標本を収集できたでしょう。ただしそれにはとてつもないほどのお金が必要です。

大金もないのに出無精では、いつまでも手の中はカラのままです。そもそも採集が楽しくないと生物学に近づかない方が、懸命な人生なのかもしれません。

KISHIDAIA担当は木村知之 〒215-0012神奈川県川崎市麻生区東百合丘4-38-12
原稿送付は池田博明 〒258-0018神奈川県足柄上郡大井町金手1099

96号の訂正とお詫び

先の談話会通信96号の記事につきまして、以下のような誤りがありました。特にお名前に関する誤りが多く、ご迷惑をお掛けしてしまいました。今後はよりいっそう校正等に注意をはらい、二度とこのようないかがないようにいたす所存です。

また特に該当された方々には失礼の方、深くお詫び申し上げます。

(編集: 笹岡)

p. 2 東京蜘蛛談話会例会総会報告

(3)

誤 ①新海 明 「カネコトタテグモの扉づくり」
正 ①永井 均・新海 明 「カネコトタテグモの扉づくり」

誤 ⑥千田高史 「西表島のクモ1999. 「これも、それも、あれも新種」」
正 ⑥谷川明男 「西表島のクモ1999. 「これも、それも、あれも新種」」

p. 9 1998年度第3回採集観察会

参加者

× 今井正己 ⇒ ○ 今井正巳 × 八幡幸彦 ⇒ ○ 八幡明彦

p. 6 近況つれづれ

「斎藤慎一郎」さん分

1. 1 × 再入力させて ⇒ ○ 再入会させて
1. 3 × 入って参ります ⇒ ○ 行って参ります

p. 8 「生物一般書に登場するクモとその”間違探し”」 平松毅久

1. 7 × イヤな正確 ⇒ ○ イヤな性格

会費値上げのお知らせ

2000年度より、一般¥3,800、学生¥2,000となります。また今年度中に2000年度以降会費前納いただける時は、値上げ後の金額にてお願いします。

今年度(1999年)まで一般¥2,800、学生¥2,000です。

郵便振込口座番号 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会

以上会費について何かご不明の点ありましたら、下記まで。

#安田 明雄: 〒226-0011 神奈川県横浜市緑区中山町329-1 中山駅前ハイツ1-506



むかしむかし、千年ほど前の話である。四谷の自証院のあたりに化けものが出て、道を行く女人の人を見るにさらつた。そのため、日暮れになると人も通れないほどさびれてしまった。

通れない所とさひれてしまつた

この話しを聞いた渡辺（倅人助）綱という勇士が、化ものを退治しようと、ある晩、薄化粧をしてカツラをかぶり、紅梅の小袖を羽織って女装し、ここに来た。道におおいかぶさる大木の下にさしかかると、木の上に黒く動く化けものがいる。さては、と思ったとき、上から紐のようなものが垂れ下がり綱の身体にまきついた。

綱は、落ちついで紐と身体の間に隙間をつくり、いつでも攻撃できるよう身がまえた。綱はす

こうにかくし持つていた短刀を抜いて切りつける。傷を負った化けものは、どうとばかり地上に落ち、綱もそれを追つて木から飛びおりたが、化けものの姿はかき消すようにどこにも見られなかつた。

ついで自証院の境内にはいり、土まんじゅうのところで消えていた。

を基にして作られたものとされる。井戸の場所は、成女学園と市谷當久小学校との間あたりで、クエストを退治した所は、今でもタキ切坂と呼んでいる。

渡辺の説は、藤嶺光四天王の一人で、羅生門で女の鬼を切ったという話が古くから伝えられている。この説をここに借りて、不思議な泉の話に結びつけたものであろう。



English name: Bruennich's argiope
Japanese name: Naga-kogane-gumo
Scientific name: *Argiope bruennichi*
Family: Araneidae

Characteristics: This spider's webs can be found throughout Japan from August through November in grassy areas and rice paddies. The family was named after Ariadne, the daughter of King Minos of Crete. She fell in love with Theseus, and saved his life by giving him a ball of thread to finds his way out of a labyrinth. Argiope, the genus name, is also derived from Greek myth, referring to a nymph. PHOTO AND TEXT BY RAN LEVY

Japan Times '97.10.13

提供：笹岡

No. 97
付録1

23

ガイドブック新宿区の文化財(6) 伝説・伝承
昭和57年3月

梅林 力さん提供

情報提供梅林 力さん

9.4.15
周刊文藝

東坡集

京三井銀行の住宅ローン
三井スーパー・ダイヤル サンキュー・サンキュー
10120-523939

123

窓辺の花

初秋の田の畦や川の土手、墓地などに、ヒガンバナの深紅の花がそこだけ青空に向かって燃えているように見える。ちょうど彼岸のころに咲くので「彼岸花」の名がある。「赤い花なら曼珠沙華」と歌われ、こちらの名の方が親しみをもつ人も多い。

ヒガンバナは全国に1000以上の方言名があるといわれ、墓地によく咲くため、シビトバナ、ユウレイバナ、ジゴクバナなど、それは陰氣でひどい名が多い。その花は、一枚の葉もないところから忽然と花茎を出し、しぶの長いクモに似た珍奇な姿をしている。人はこの花を毒々しいとか、妖気が漂うという。まして墓地に咲くものだから不気味さがあり、忌み嫌われながら生きてきた花である。

ところでヒガンバナの生えているところだが、人間の生活の周辺に多く、自然の環境にはあまり見かけない。調べてみるとこれには理由がある。ヒガンバナの球根は有毒だが、水にさらせば多量のデンプンが残るところから、江戸

時代には飢饉に備え、家々の周辺にこの植物を植えたのだ。ヒガンバナが人里近く好んで生きてきたのは、昔の人々の生活の名残であろうか。昔から人間の役にたちながら、たまたまイメージが悪いばかりに忌まわしい名ばかりつけられて、誠に気の毒な花である。

ヒガンバナは洋名をリコリスといい、タネナシスイカと同じ三倍体でタネができないため改良種も少ないが、仲間には、黄色、白色、薄紫色などほかの花色をもつ種類もあり、欧米ではスパイダーリリーとかマジックリリーと呼ばれ、東洋的な花として人気がある。

ヒガンバナは葉があるときに花が咲かず、花があるとき葉がないところから「ハミズハナミズ」ともいい、花も個性的なら生活サイクルもユニークである。最近は世代も変わってよさが見直され、好んで栽培する人も増えている。みんなに愛される予感が的中のきざしがあり愛好者一人としてうれしいことだ。

(サカタのタネ 酒井久雄)

初秋の畠に燃えるような花

ヒガンバナ

産経新聞 '98.9.21

産経新聞 1995.8.4



庭で変わった形のクモの巣を見つけました。四方に伸びているシグザグの太い糸は2日かかりの労作です。

佐藤文夫 77
(宮城県柴田町 理容師)



燃えるように赤いヒガンバナ

クモとバイブを勘違い

朝日新聞 '99.5.29

機器の音が耳に響いていた。彼は、ステッキの内ポケットがモノモソ動くのが伝わると、なぜか本能的に「ク、クモがいるぞー」と思って、ステッキを腰に抱き、逆さまにして振りまくった。ゴトントと床に落ちた機器を見た時、顎にまで鳥肌が立っていた。

(ぶち 神奈川県 自営業) うまい友人は、おじりのポケットでやるそこのを強調と勘違いした(ちなみに友人は男)。

電脳映画室

この頁の記事すべて

梅林 力さん提供

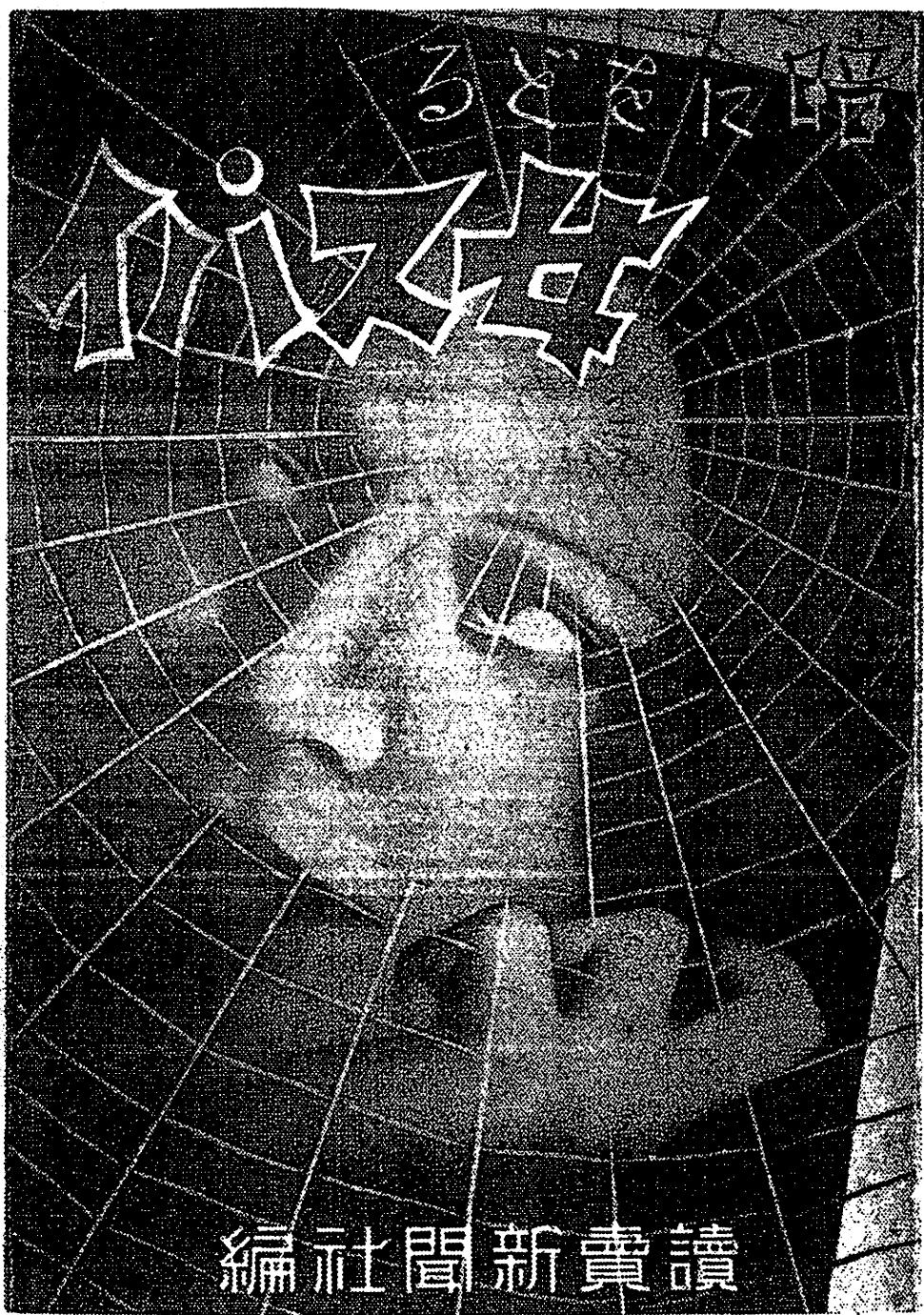
私が売っているのをよく見かける。しかし、一月にカンボジアに行つたとき、大人の手のひらほどもあるクモが、バケツいっぱい売っていたのにはさすがに驚いた。

カンボジアの知人に聞くと、油で揚げたり、日本のかつてはフランス領本のまむし酒のようにアーラーに漬けたりして買った。そこで、「どう書くとカンボジアは依然、未開拓地のよつたがかつてはフランス領だっただけにフランスは絶品だ。六〇年代後半に、ここに過ごした日本人の話でも、当時からとにかくパンはうまかったそうだ。テレビでは、歐米の街角で、色々の果実を売っているのが映し出される。しかし、東南アジアでは果物どころか、クモ、ゲンゴロウ、ヘビと彩りは実にあさやかだ。これが、うまうに見えるようになれば、自分も一人前の土地子になれるのだろうが…。」「食べるか」と聞

No. 97

付録2

産経新聞 '99.2.3



昭和13年3月発行

提供：筆觸

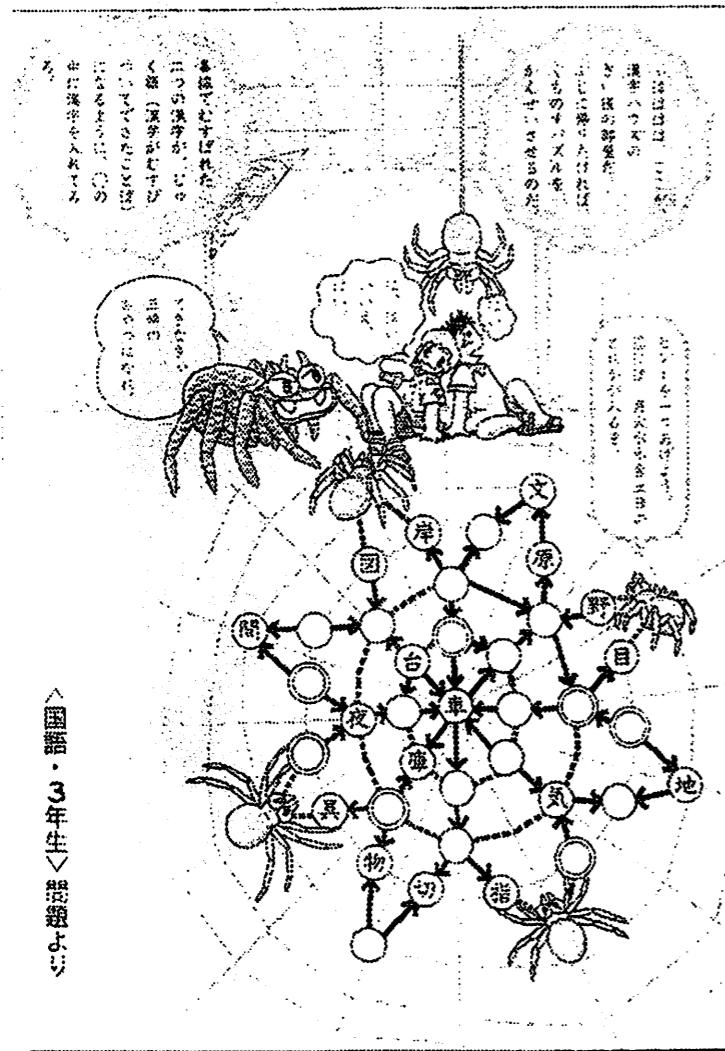
讀賣新聞社編

丹沢だより 346
'98.10

外沢自然保護協会会報表紙

山川 守さん提供

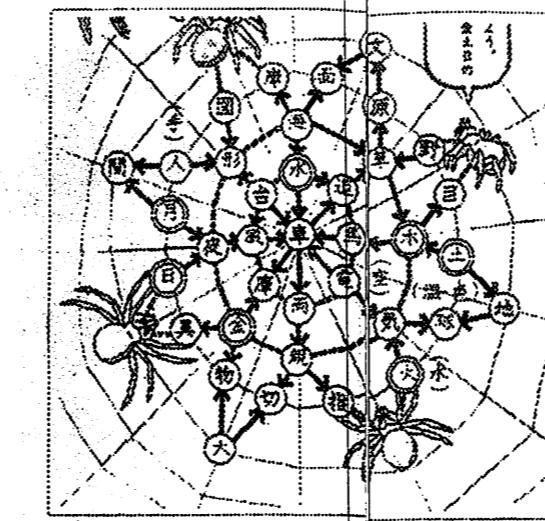
No. 97



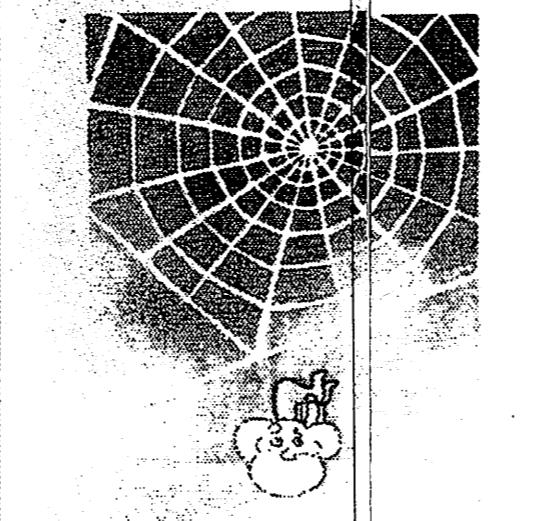
産経新聞 '97.3.5

No. 97

梅林 力さん提供



—パショラル先生からの手紙



くもになって
銀のおりものにつくる

朝日新聞 '99.6.2



ヤングチャンピオン '98.7.9号
「キチキチくん」p.222より

高橋祐子さん提供